

死別体験および死のイメージに関する 心理学研究の動向と展望

尾方 綾

(2011年10月6日受理)

A Review and Considerations of Psychological Studies on Experience of Bereavement
and Images of Death

Aya Ogata

Abstract: The problem of youth suicide has stirred a great deal of controversy, but issues relating to death and dying are still generally far from people's minds. The purpose of this study is to explore how people apprehend death and to review recent research trends addressing this issue. Attitudinal studies about death reveal a significant shift away from the one-dimensional anxiety of the past toward a multi-dimensional perception of death. Although morbid attitudes tend to be oppressive, the association between conscious and unconscious dimensions of death-related attitudes has not been fully explored. More recently, a number of studies have focused on the positive aspects of bereavement. It is believed that this is linked to the emerging multi-dimensional understanding of death, but again the association between a person's attitude toward death and whether that person experiences bereavement has not been thoroughly examined. Note that this goes beyond the mental state of a widowed person after experiencing bereavement, for it encompasses how the survivor perceives death, bereavement, and life itself. Future work will consider the bereavement experience (1) by examining how mental attitudes toward death are shaped closer to the subconscious level, and (2) by considering the broader perceptions of survivors toward death, bereavement, and life. Obviously, these themes have an enormous impact on one's perceived image of death.

Key words: death anxiety, attitudes toward death, experience of bereavement, images of death

キーワード：死の不安、死に対する態度、死別体験、死のイメージ

問題と目的

死に関する諸問題について

平成21年の人口動態統計（厚生労働省大臣官房統計情報部、2011）によると、自殺による死亡者は全死亡者数の2.7%であり、死亡原因の7位に位置しているが、15～19歳では、不慮の事故と自殺が死亡原因の1位であり、20～24歳、25～29歳、30～34歳、35～39歳では自殺が死亡原因の1位となっている。近年の若年

層の自殺は大きな問題と言える。また、猟奇的な事件や少年・少女による事件なども多く報道されている。

しかし、死は日常から隔てられているのが現状である。丸山（1988）は、“人間は自分が死ぬ存在であることをあえて無視する態度をとり、かつ自分はおろか自分の周囲にいかなる死も存在しないかのように振舞うことが要求されている”としている。山中（2006）は、「誕生」や「死」のようなテーマが病院という清潔な環境下で、すべてガラスの向こう側カーテンの向こう

側の清潔な世界へと切り離されてしまい、死の問題はリセット可能であるという、バーチャルな世界と混同されたテーマとなっているとしている。伊藤(2007)は、大学生を対象として、死や死後のイメージに関するアンケートとインタビューを実施した結果、近親者を亡くした若者の死生観の5つの特徴を見出している。その中に、死について語る(質問する)ことがタブー視されているという特徴や、自分と年齢の近い他者の死の体験を通じたとしても、自分の死すべき運命と結びつけて考えることはしないという、他者の死と自己の日常の乖離という特徴が見出されている。このように、死は我々の日常から隔てられ、タブー視されている状態であると言える。

一方で澤井(2000)は、かつてはタブー(禁忌)であった死が、いまやその拘束から解き放たれ、自由に語られ、人々の目にさらされる対象となったと述べている。しかし、それはあくまでマス・メディアが媒介する「情報」としての死であり、「情報」としての死は、人を死そのものに直面させるというよりは、むしろ生へと立ち返らせるものであるとしている。そして、その一方で、人間が唯一直接経験できる「二人称」の死、つまり他者の死、死別者の悲哀をともに生きることは忌避されているとしている。

このような現状の中、病名の告知や尊厳死の問題、脳死や臓器移植など、個人の死生観が問われるような問題が多く存在する。本稿では、これまでどのように死に関して捉えられてきたのか、その研究の動向をまとめ、現状を踏まえて、今後の課題と展望についてまとめることとする。

死への心的態度に関する研究

死の不安

死に関する態度の中で多く取り上げられてきた問題の一つが、死の不安である。Freud(1926 井村訳 1970)は、“不安は漠然とした対象のない恐れ感情であり、特定の経路による緊張解除の作用をともなう特殊な不快状態”であるとし、心的危機の予知としての信号不安と、内的安定のための防衛機制について論じている。不安は、“しかるべき理由があり、怖れられる対象が明白であり、それに対して対決するにせよ逃避するにせよ、我々がしかるべき対処ができる現実不安”(笠原, 1983)と、分からない危険に対する神経症的不安(Freud, 1926 井村訳 1970)に区別される。ただし、現実不安も、本質的には何を恐れているかわからないために不安が生じると考えられる。しかし、現実不安であれ神経症的不安であれ、恐れてい

る何かを象徴するものが恐れの対象となるという意味で、わからなさを対象化しつつあるとは言えるだろう。

死の不安の場合、不安の対象は一見明白である点で現実不安だが、生命の危機に瀕していなくとも、いずれ死は免れえない点で他の現実不安とは一線を画す。物理的に自己存在を喪失する点で、「自分はなぜ存在するのか」という自己存在や世界についての根源的な課題をつきつけられ乗り越えることが要請され、大きな成長可能性も秘めると同時に、大きな自己更新を迫られる点で、心的水準での死の不安の問題にリンクし、神経症的不安をも惹起しうると考えられる。

この点に関し、死が不可知で体験することができないため、意識の上では病気や災害に対する不安に置き換えられるとする考えや、死を恐れることは、死そのものを恐れるというよりも、死によって喪失してしまうことに対する恐れである(Levitt, 1966 鳴澤訳 1969)という考えがある。宮本(1983)は、不安の消退が、不安から逃げるところではなく、不安を受け入れるところに生ずるとし、さらには「死の不安」なるものが死と直面しての不安ではなく、死を拒否することによる不安であることを暗示しているとしている。また、丸山(1988)は、“死がタブーであればある程、人間の目から死者が遠ざけられればられる程、死はいつの間にか人間の心の中にある種の原始的不安を植え付け、魔術的呪術的行為を触発する要となる”としている。

死の不安は、現実の死と心的な死を自分の中でどう位置づけるのかという大きな不可知性に対する恐れであると考えられる。さらに、死をタブー化し、死を遠ざけることによって、より深く原始的な不安を植え付けることになる。したがって、死をどのように受け止め、自分の中に位置づけるのかということの第一歩は、死の不安を不安として捉えることであると考えられる。

死の心的な態度の測定方法

死の不安を捉えるために、Templer(1970)のDeath Anxiety Scale(DAS)などの質問紙法が多く用いられてきた。DASは15項目2件法の質問紙であり、高得点ほど死の不安が強いとされる。

これまで、DASなどの質問紙法を用いて、死の不安の性差や年齢による差など、さまざまな関連が検討されている。金見(1994)は、DASを用いた調査から、男性よりも女性の方が死の不安が強いことを示している。しかし、松田(1996)やD'Attilio & Campbell(1990)の調査では性別の違いによる有意な差は見られておらず、一貫した結果は得られていない。年齢や世代による違いに関しては、金見(1994)が、大学生とその両

親を対象に調査を行った結果、親よりも子どもの方が死の不安が強いことが示されている。その他にも、自殺への態度と死の不安との関連 (D'Attilolo & Campbell, 1990) や、ユーモアを用いたコーピングと死の不安との関連を調べた研究 (Thorson & Powell, 1993) などがある。

DAS は一般的不安とは別の不安を測っていることが主張されているが、問題点として、低得点の説明が困難であることが指摘されている (金児, 1994)。低得点者は、本当に死の不安が低いのか、死への無関心や、大きな不安から抑圧が生じているのか、得点からは判別できないためである。岡村 (1983) は、“自己報告による意識水準の測定の結果からは適応的であれ不適応的であれ何らかの防衛性の存在度が推定される”と述べている。つまり、DAS などの自記式の質問紙では、意識水準の死の不安を対象とするため、無意識下に働いている防衛について明確に測定することはできない可能性が考えられる。このように、無意識下に抑圧される可能性のある死の不安について検討するためには、より無意識に近い水準でどのように死を捉えているのかについても検討する必要があると言える。

また、“死に対する不安は死を取り巻く信念体系の一部にすぎず、それだけでは全体的な死の態度構造が把握できない” (金児, 1994) という指摘は重視すべきであろう。丹下 (1999) は、死に対する心理を扱う研究では、恐怖に主眼をおいた感情的側面のみではなく、「生」や「死ぬ過程」といった死と切り離して考えることの出来ない部分を含めて多面的に「死」を捉えていくことの必要性を指摘している。

このような点に関し、死に対する態度について多角的に捉えようとする研究がある。例えば、Wong, Reler & Gesser (1994) の Death Attitude Profile-Revised は、「死の恐怖 (Fear of Death)」、「死の回避 (Death Avoidance)」、「中立型受容 (Neutral Acceptance)」、「接近型受容 (Approach Acceptance)」、「逃避型受容 (Escape Acceptance)」の 5 つの因子を含む多次元尺度である。また、死観尺度 (金児, 1994) は、Spilka の Death and personal faith の日本語版であり、「浄福な来世」、「挫折との別離」、「苦しみと孤独」、「人生の試練」、「未知」、「虚無」の 6 つの因子から成り立つ。

丹下 (1999) の死に対する態度尺度は、「死に対する恐怖尺度」、「生を全うさせる意志尺度」、「人生に対して死が持つ意味尺度」、「死の軽視尺度」、「死後の生活への信念尺度」、「身体と精神の死尺度」の 6 つの下位尺度から構成されており、この尺度を用いて様々な

検討がなされている。例えば丹下 (2004a) では、青年期前期中期を対象に、死に対する態度の様相について検討している。その結果、死に対する態度は主に、中学の期間を中心に年齢に伴い変化しており、概して死に対する否定的な態度が減少するとともに生に対する積極的な態度が減少することが示されているとしている。このことから、生きることに對して積極的でありながら死に対しても肯定的な見方ができるという成人後期の状態に至るまでに、一時的に生に対する積極性と死に対する否定的態度が共に低下する、という青年前期・中期の特徴を示している。風間 (2006) は、看護学生の死生観の学年変化を検討した結果、看護教育では看護学生の死に対する恐怖や不安は変化せず、死を他人事のように感じる死生観が看護教育や臨地実習を契機に強くなることが示されている。また、生と死の意味や死ぬ過程について考えるような死生観に変化はなかったとしており、看護学生に対する死生観の教育は、看護教育や臨地実習の機会に、死に対する思索のきっかけを与えることが必要であると述べている。他にも、死に対する態度と、宗教性との関連を検討している研究 (丹下, 2004b) などがある。

このように、従来から検討されてきた、死の不安や恐怖は、一次的に捉えるだけでは限界があるという考えのもと、近年、死に対する態度を多角的に捉えようとする動きがあると言える。このような動きは、死に対する態度や死生観について、ネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面も含めて捉えようとする動きに影響していると言える。

一方で、抑圧された死の不安や恐怖は、自記式の質問紙法だけでは検討することが困難であるという問題点が残っていると言える。

死別体験に関する研究

死にまつわる大きな問題の一つとして、死別体験が挙げられる。ここでは、死別体験に関する研究について概観する。

対象喪失

重要な他者との死別に代表される、愛着や依存の対象の喪失は対象喪失 (object loss) と呼ばれる。小此木 (1979) は、“対象を失うことの悲しみをどう悲しむかは、人間にとって永遠の課題である”としている。Freud (1917 井村訳 1970) は、悲哀について、“現実検討によって愛する対象がもはや存在しないということが分かり、すべてのリビドーはその対象との結びつきから離れることを余儀なくされる”とするが、これに対し当然反抗が生ずるとし、“時間と充当エネルギー

ギーをたくさん消費しながら、ひとつひとつ遂行してゆくのであって、そのあいだ、失われた対象は心の中に存在しつづける、悲哀の作業が完了したあとでは、自我はふたたび自由になって、制止もとれる”としている。

喪の作業と悲哀のプロセス

これまで理論化されてきた死別体験後の悲哀のプロセスは、大きく「段階的モデル」と「課題モデル」に分けられる。

段階的モデルに代表されるのは Deeken (1996) の「12段階のモデル」であり、①精神的打撃と麻痺状態、②否認、③パニック、④怒りと不当感、⑤敵意とルサンチマン、⑥罪悪感、⑦空想形成、幻想、⑧孤独感と抑うつ、⑨精神的混乱とアパシー、⑩あきらめ、⑪新しい希望、⑫立ち直りの段階、が挙げられている。また、山本 (1997) は、「物理的喪失」と「心理的喪失」の組合せを想定し、各々の水準での喪失の有無を区別することで、4種の喪失領域に区別している。このうち、事実の水準では未だ喪失は起こっていないが、内的経験としては喪失が生起している様態を「予期の様態」、実際上も、経験上でも全面的に喪失が生じている典型的な喪・悲哀の様態を「崩壊の様態」、事実としては喪失が生起しているが、経験の上では心理的結合が保たれている様態を「補償の様態」とし、対人関係上のさまざまな喪失形態は、この3種の「様態(位相)」(Phase) のいずれかの領域に位置づけられるとしている。さらに、悲哀の過程は、この「予期の様態」から「崩壊の様態」を経て「補償の様態」に至る経過をたどるとされている。

課題モデルには、Worden (1991 鳴澤訳 1993) の「悲哀の4つの課題」が挙げられる。①喪失の事実を受容する、②悲嘆の苦痛をのりこえる、③死者のいない環境に適応する、④死者を情緒的に再配置し、生活をつづける、という課題が悲哀の作業の完了まで互いに絡み合って進行するとされる。

このような従来のモデルに対し、Stroebe & Schut (1999) は、コーピングという観点から、「二重過程モデル (Dual Process Model)」を提唱している。二重過程モデルでは、死別後の対処に2つの方向性が想定されている。1つは、喪失自体に対する対処であり、これは従来の「喪の作業」に相当する。もう1つは、死別の結果として生じる二次的な問題に焦点を当てた対処であり、死別後の対処過程は、このような二方向の対処による並列の動的過程であるとされている。坂口・柏木・恒藤 (2001) は、死別対処尺度を作成し、配偶者喪失者を対象に、死別後の対処パターンと精神

健康との関連を検討している。その結果、従来の喪の作業では、抑圧・回避や故人への執着は病的悲嘆を導くとされているが、故人からの回避や故人との絆保持といった対処は必ずしも不適応対処とは言いきれず、配偶者喪失後の適応/不適応対処に関しては生活・人生志向の対処の程度に注目する必要性を指摘している。また、金子 (2007) は、小児がんで子どもを亡くした母親の悲嘆過程を検討した結果、母親の悲嘆過程でも「二重過程モデル」で示されていることと同じような特徴があるとし、母親の悲嘆過程は、悲嘆を乗り越えたり、そこから回復して生きていくことをゴールとしたものではなく、精神面や対人関係において落ち込みと安定の状態を往復してバランスを保ちながら、悲嘆とともに子どもと共存して生きていく過程であることを示している。

上記のような、死別体験の悲哀のプロセスに関する各モデルは、対象喪失にまつわる悲哀の作業における「状態像」に関するものであり、悲哀のプロセスの研究では、死別体験をした者がどのような様態をたどるかに焦点を当てたものが多い。このような悲哀のプロセスの検討は、心理学の領域だけでなく、ホスピスや緩和ケアなどの医療や看護の領域、セルフヘルプ・グループやサポートグループなどの社会福祉の領域でも進められており、死別者への援助を考える一助となっている。

一方で、才藤 (2006) は、従来の悲哀のプロセスに関する研究について、“死別への反応を一般化することに重点を置きすぎており、悲嘆にみられる個人的な差異と多様性を無視しがちである”と指摘している。また、才藤 (2006) は、欧米における悲嘆の研究の近年の動向をレビューし、悲嘆の中にある人が自分の喪失体験をどのように理解しどういう意味づけをするかということが、その人の死別体験からの回復のプロセスに大きく影響を与えるという考えを紹介し、死別の体験は、それを体験した人が自分を取り巻く世界を新しく理解しなおし、能動的に学びなおすよい契機としてとらえられているとしている。

つまり、死別を「乗り越える」にいたるプロセスにおいて、死別体験をどう捉えるかという側面や、死生観の確立や変化を生じさせたり、死について改めて捉えなおしたりする側面を検討する必要があると言える。

このような点に関し、渡邊 (2004) は、成人を対象に、死別をどのように認知しているのかを検討した結果、死別に対する心理的影響と、死別や死、死別経験後の人生への関わり方によって、A 主体的意味づけ型、B 受動的意味づけ型、C 中立型、D 表面的解決型、E

苦痛型、F 逃避型、G 悲嘆型の7つのタイプを見出している。更に、死別に対して肯定的で、関わり方も主体的であったA型は、死別経験によって人格的発達が進められる可能性が示唆されたが、死別や死、死別経験後の人生に対して関わり方が受動的であったB型・D型においても、死別経験による人格的発達との関連が見出されている。また、隈元（2003）は、“死別体験によって、否応なく死に直面させられた人びとがどのようにそれに取り組むかということは、多くの困難を覚えながらも人間の根源的イメージに出会い、それによって日常生活に生きる自分自身の生の意味それ自体を変化させる体験である”としている。つまり、悲哀のプロセスでは、死のイメージの変容や自分自身の生の意味の変化が体験されると言える。

このように、死別体験は、悲哀を乗り越えるという側面だけでなく、その後の人格的発達や、自分自身の生の意味を捉えなおすという側面が含まれており、死別体験は、その人の死に対する態度や生に対する態度に大きな影響を与えると考えられる。しかし、これまでに、死別体験と死に対する態度の関連を実証的に検討する調査は行われているが、死別体験の有無と死に対する態度の間に、関連はほとんど見出されていない。丹下（2004a）は、その理由として、死別体験の「有無」は扱ったが「特徴」は扱っていないという方法上の問題を挙げている。また、身近な人との死別体験の有無が個人の死に対する態度に明確な差異をもたらすのは児童期までであり、青年期以降は他の要因の影響が大きくなる可能性を指摘しているが、“生涯発達のには死に対する態度の形成や変容に対して死別体験は何らかの形で関与しているものと考えの方が妥当である”（丹下、2004a）としている。Worden（1991 鳴澤訳 1993）は、喪失に対する反応を予測するには、だれを失ったかがわかるだけでなく、愛着についてわかっている必要があるとしている。しかし、これまでの研究では、調査者の方で死別した対象を限定するか、もしくは、死別体験の有無にのみ焦点を当てた研究が主であった。今後、死別者と死者との関係について、死別者自身がどう捉えていたのかという視点を踏まえて、死別体験について検討することが必要であろう。

以上から、死別体験を考える上で、死別者が死別をどう体験し、死にどのようなイメージを持つのかについて検討することが、今後重要であると考えられる。

死のイメージに関する研究

死とは、自己の存在を脅かすものであるがゆえに、無意識下に抑圧されやすいと考えられる。そのため、

死の不安に代表されるような死に対する態度について検討する場合、自記式の質問紙は、意識水準の死に対する態度を対象とするため、無意識下に働いている防衛について明確にすることは難しいと考えられる。また、死別体験においては、死別後にどのような様態をたどるのかということだけでなく、死別者が死別をどのように捉え、体験しているのか、イメージという視点を踏まえて検討する必要性が考えられる。

それでは、これまで死に対するイメージはどのように捉えられてきたのだろうか。ここでは、死のイメージに関する研究について概観する。

死のイメージ

柏木（1999）は、医師、看護婦、一般の人の死のイメージについて調査した結果、一般の人の死のイメージの中で最も多いのは「さみしい」（38.3%）で、次に「こわい」（33.4%）、さらに「くるしい」（10.1%）、「やすらか」（8.4%）、「うつくしい」（1.1%）と続くとしている。糸島（2005）の看護学生と大学生を比較した調査では、看護学生は大学生に比べて、死を「一般的な事実や事象」としてイメージしている学生が62.2%と多く、大学生は看護学生に比べて、「悲しい」「寂しい」などの「感情表現」をしている学生が56.8%と多いという結果が得られている。しかし、「自分自身の死」までイメージしている学生は、看護学生では26.7%、大学生では25.0%と、両者間に差は見られていない。また、齋藤・林・藤野（2002）は、大学生の死のイメージと自我状態（TEG）、Self-Esteem（SE）との関連を検討している。その結果、死のイメージの中で、最も多くの学生が1位に選択したのは「怖い」、次に「寂しい」「苦しい」「安らか」「美しい」の順であった。また、死のイメージとSEの関係では、「怖い」を1位に選択した群が、2位以下に選択した群に比してSE得点が有意に高く、「安らか」の項目を3位以下に選択した群が、1、2位に選択した群に比して有意にSE得点が高かったという結果が得られており、自尊感情、自己評価が高いがゆえ、自分自身の肉体や精神の喪失である死を肯定的に捉えることができず、また、恐怖心を強く覚えると推察されている。

死のイメージを測定する方法として、SD法や、連想語のKJ法による分類などが代表的である。

丹下（2002）は、死生観の構造やその発達差を検討するため、「死」という語からの連想語を分類した結果、「死」に関連するカテゴリだけでなく、「生」に関するカテゴリも見出されている。また、年齢が上がると単に連想語数が増えるだけでなく、連想の領域も広がっているとしている。死に「ネガティブ」な反応だけでなく「ポジティブ」な反応も見られる研究（丹下、

2002；藤井，2003；石坂，2003，2004）や、死に肯定、否定の相反する両方を意味づける「アンビバレント」な態度が見出された研究（石坂，2003）もある。

SD法による調査はこれまで多く行われてきている。例えば、岡村（1983）は、「死」、「自分」、「人生」、「病気」、「老人」という概念のイメージ、及び、各概念間の距離を、SD法を用いて調査している。その結果、「死」は成人の方がより「正確な」とイメージし、青年の方がより「一貫した」「長い」「四角い」「つめたい」とイメージしていることが示されている。また、概念間距離については、青年後期・プレ成人期では「死」との距離において「自分」「人生」は「病気」「老人」とは区別された大きな距離を持つのにに対し、青年前期は「死」との距離において「自分」「人生」「老人」が1群となって「病気」とは区別された大きな距離を持つという結果などが得られている。

李（1990）は、単独形容詞SD法には、両極性の尺度上では中点に評定されていたものの内容をより明確にしうるとし、単独形容詞SD法を用いて、青年がもつ生、死、言葉、身体、イメージを測定している。その結果、青年は、生、死、言葉、身体に対して、肯定的と否定的の両方のイメージを同時にもち、一方のイメージにより他方を否定するのではなく、両者を共存させていることが示されている。松下・尾方（2007）は、単独形容詞SD法を用い、青年期における「死」「生」「自己」のイメージの全体像を検討している。その結果、青年期においては、「生」「自己」にポジティブなイメージを、「死」にネガティブなイメージを抱くが、各概念ともに「大きい」、「深い」イメージを抱き、「軽々しい」、「疎遠な」イメージは弱いことから、「死」「生」「自己」それぞれが青年期にとって重要なテーマとして捉えられていると指摘している。

死のイメージと様々な指標との関連

SD法で測定される死のイメージと、様々な指標との関連も検討されている。例えば、李（1990）は、生、死、言葉、身体、イメージについて男女差を検討している。その結果、生に対しても死に対しても、男子は悲観的、一面的なイメージを抱きやすく、女子は、より楽観的、両面的なイメージを抱きやすいことが示されている。さらに、私という概念を加え、SD法尺度の第I因子である肯定的イメージの因子得点を横軸、第II因子である否定的イメージの因子得点を縦軸とする座標平面上に各概念を位置付けた結果、女子においては自己イメージと生のイメージとが類似しており、自己への感じ方が生への感じ方を規定していると考えられる一方で、男子は自己イメージと生のイメージとの間に隔たりがあり、生よりも自己に対して否定的で

あるという結果が示されている。

また、渋谷・渋谷（1991）は、自殺念慮とSD法による生・死イメージの関連を検討している。その結果、自殺念慮の高い人は、自殺念慮の低い人やまったくくない人に比べ、死により肯定的なイメージをもつこと、自殺念慮が高い人は、死を「大きい」「強い」とイメージしながら、同時に「消極的」で「狭い」ものとうけとる、いわゆるアンビバレンツな状態に陥っていることが示されている。

死別体験との関連では、齋藤他（2002）の調査では、身近な人の死の経験がある者は特に死のイメージとして「寂しい」を選択しているという結果が得られているが、死別体験と死のイメージとの関連を実証的に検討した研究はほとんど見られない。

死の不安との関連もこれまでいくつか検討がされている。岡村（1983）では、DASとの関連について、青年前期において、「身体性」の死の不安が高いと「死」と「病気」とが似たものとイメージされる傾向、成人期において、「身体性」の死の不安が高いと「死」と「老人」とが別のものとしてイメージされる傾向があることが示されている。松下・尾方（2007）は、DAS得点の高低で、SD法による「死」「生」「自己」のイメージの違いを検討している。その結果、「死」を肯定的に受け入れられない態度と死の不安の高さに関連があること、「死」「生」「自己」を自分のものとして捉えられないことと死の不安の低さが関連していることを明らかにしている。

空間象徴の中での死のイメージ

これまでに、SD法によって死などの概念のイメージが測定されてきた。また、死や生にどのようなイメージを抱くのかということだけでなく、各概念間の距離をどのように捉えているのかという視点から、死や生などのイメージが検討されてきたと言える。

しかし、SD法は調査者側が用意した形容詞対のイメージの測定に限られるという問題がある。特に、死のような、自己との関係や位置づけを捉えにくく対象化しにくいものは、明確に言語化するイメージとしては意識化しにくいと考えられる。そのような、明確に言語化しにくいが存在しているイメージにアプローチする必要があると考えられる。

その点に関し、死や生を含めた世界観をどのようにイメージしているかに関して、死や生を内界に位置づける際のより無意識的な視点を抽出しようとする研究がある。松下（2000）は箱庭療法や描画法の一つであるGrünwaldの空間象徴図式の実証的検討の1つとして、空間に世界を感じ取る無意識的な視点を抽出している。図式に含まれる、「死」－「生」、「光」－「影」

等の対になる象徴語20語に「自己」を加えた21語をもとにした2語1対、計210対について、各象徴語のイメージが本質的に近いか遠いかを、「1=本質的に同じ」から「25=本質的に異なる」までの25段階で評定してもらい（高根，1980）、この評定値をもとに多次元尺度法で分析した結果、3次元が抽出されている。第1次元（DIM 1）も第2次元（DIM 2）も「生」と「死」が近くに位置し、「生」と「死」は本質的に非常に近いものとしてイメージされているのに対し、第3次元（DIM 3）は「生」と「死」が本質的に遠いものとしてイメージされていることが特徴的であるとされており、DIM 1とDIM 2は、DIM 3とは、相互排他的な視点であることが確認されている。また、DIM 1では、「生」「死」が、「自己」と近いものとしてイメージされており、DIM 2では、「生」「死」は、「自己」とは遠いものとしてイメージされている。これらの3次元は「生」と「死」をどのように位置づけ、「自己」とどのように関連付けているのかの違いによると考えられ、「死」と「生」が本質的に近いものとイメージされる次元と、遠いものとイメージされる次元のいずれかを個人の中で重み付けるかによって、「死」のイメージと空間イメージが変化することが明らかにされている。

空間象徴図式の中の「死」に関して、秀島・岩元・原口（2006）は、SD法によって、「空間図式」の象徴言語自体のもつイメージを調査している。形容詞の得点に対する主成分分析の結果、「空間図式」上の16語は、「生存の資源」と「生存の促進」と称した抽象的なイメージで捉えられる言葉であることが示されている。また、中高年群では、「生存の促進」のイメージ得点がプラスの言葉とマイナスの言葉に2分され、これが「空間図式」上の言葉を下側と上側に2分したときの言葉と一致していることが示されている。つまり中高年群では、「生存の促進」のイメージ得点がプラスであった「誕生」、「母性」、「未来」、「水」、「身体」、「大地」、「過去」、「無意識」は、「空間図式」では下側にあり、「生存の促進」のイメージ得点がマイナスであった「希望」、「空気」、「火」、「父性」、「心」、「意識」は、「空間図式」では上側に配置されていたが、「死」に関しては、イメージ得点と「空間図式」上の配置とが一致しなかったことが示されている。このことに関して秀島他（2006）は、「誕生」との関連をふまえて、死生観の観点などからも検討を重ねる必要があるとしている。

以上より、「死」という象徴語を捉える上で、その人が「死」や「生」を心的にどのように捉え、位置付けているのかによって、「死」という象徴語のイメー

ジや捉え方は異なっている可能性があり、今後、死のイメージを捉えていく上で、その人が「死」や「生」を、「自己」とどのように関連付け、どのように捉えているのかを踏まえる必要があると考えられる。

まとめと今後の課題

本稿では、死に関してどのように捉えられてきたのか、その研究の動向を概観した。

死への心的な態度について、従来は死の不安を一次的に捉えられてきたが、近年では、死に対する態度について多次元的に捉えようとする傾向にあることが示唆された。しかし、死に対する心的な態度は抑圧される可能性があることが示唆されているが、意識水準の死に対する態度と、より無意識に近い水準での死に対する態度との関連は十分に検討されているとは言えなかった。

また、死別体験に関する研究では、近年、悲哀をどう乗り越えるのかという視点だけではなく、死別体験の肯定的な側面に焦点を当てた研究も見られており、死に対する態度について多次元的に捉えようとする動きと連動していると考えられた。しかし、死別体験の有無と、死に対する態度については、関連が十分に見出されているとは言えなかった。また、死別体験後の「状態像」を捉えるだけではなく、死別者が死別をどう捉え、どのように死や生を捉えているのかについて検討していく必要性が示唆された。

今後の研究として以下の点が重要と考えられる。

- ①死の不安に代表されるような死に対する心的態度について、意識水準からだけではなく、より無意識に近い水準から検討する必要性があること。
- ②死別者が、死や死別、生についてどのように捉えているのかという視点から、死別体験について検討すること。

以上の点について、死に対するイメージという視点が重要であると考えられるが、死に対する態度や死別体験と、死のイメージとの関連を検討する実証的な研究は少ない。しかし、死別体験に取りくむことについて、多くの困難を覚えながらも人間の根源的イメージに出会い、それによって日常生活に生きる自分自身の生の意味それ自体を変化させる体験である（隈元，2003）とされるように、死や生のイメージも踏まえて死別体験について捉えることで、死別体験や悲哀のプロセスの理解に繋がると考えられるだろう。

【謝 辞】

本論文の執筆にあたり、主任指導教員である岡本祐子教授より、貴重なご示唆を賜りました。お礼申し上げます。

【引用文献】

- Deeken, A. (1996). 死とどう向き合うか 日本放送出版協会
- D'Attilio, J.P. & Campbell, B. (1990). Relationship between death anxiety and suicide potential in an adolescent population. *Psychological Reports*, **67**, 975-978.
- Freud, S. (1917). Trauer und Melancholie. *International Zeidschrift fur arzriche Psychoanalyse*, **4**, 288-301.
(井村恒郎 (訳) (1970). 悲哀とメランコリー フロイト著作集第6巻 自我論・不安本能論 人文書院 pp.137-149.)
- Freud, S. (1926). Hemmung, Sympotpm und Augst. Wien: *Internationale Psychoanalytischer Verlag*.
(井村恒郎 (訳) (1970). 制止, 症状, 不安 フロイト著作集第6巻 自我論・不安本能論 人文書院 pp.320-376.)
- 藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ—テキストマイニングによる分析— 関西学院大学社会学部紀要, **95**, 145-155.
- 秀島眞佐子・岩元澄子・原口雅浩 (2006). 空間象徴図式の検討—Grünwaldの空間図式からの展開— 久留米大学心理学研究, **5**, 149-156.
- 石坂昌子 (2003). 死の意味づけの質的検討と量的検討—死に対する心理の理解 (1) — 日本心理学会第67回大会発表論文集, 300.
- 石坂昌子 (2004). 死の意味づけの関連要因の検討—死の対する心理の理解 (2) — 日本心理学会第68回大会発表論文集, 289.
- 糸島陽子 (2005). 死生観形成に関する調査—看護学生と大学生の比較— 京都市立看護短期大学紀要, **30**, 141-147.
- 伊藤雅之 (2007). 若者の死生観—日本人大学生が抱く死と死後のイメージ— 愛知学院大学文学部紀要, **37**, 95-100.
- 金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究大阪市立大学文学部紀要, **46**, 1-28.
- 金子絵理乃 (2007). 小児がんで子どもを亡くした母親の悲嘆過程—「語り」からみるセルフヘルプ・グループ/サポート・グループへの参加の意味— 社会福祉学, **47** (4), 43-59.
- 笠原 嘉 (1983). 不安・ゆううつ・無気力—正常と異常の境目— 安永 浩 (編) 岩波講座精神の科学3 精神の危機 岩波書店 pp.207-260.
- 柏木哲夫 (1999). 死とストレス 現代のエスプリ別冊現代のストレスの課題と対応 至文堂 pp.227-237.
- 風間たま代・川守田千秋 (2006). 看護学生の死生観の学年変化に関する一考察—丹下の「死に対する態度尺度」と用いて— 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, **14**, 25-36.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (2011). 平成21年人口動態統計上巻 厚生統計協会
- 隈元みちる (2003). 死別による生の意味の変化に関する一考察—「異界」との関わりの中からは— 心理臨床学研究, **21**, 25-33.
- Levitt, E.E. (1966). *The psychology of anxiety*. New York: Bobbs-Merrill.
(西川好夫 (訳) (1969). 不安の心理学 法政大学出版局)
- 丸山久美子 (1988). 死とエトス—現代青年の社会不安と死生観— 聖学院大学論集, **1**, 163-178.
- 松田信樹 (1996). 青年の死の不安を規定する要因についての検討—性差, 死別体験, 時間的展望の観点から— 人間科学研究 (神戸大学), **4**, 57-65.
- 松下姫歌 (2000). Grünwaldの空間象徴理論における「死」の象徴性の二側面 箱庭療法学研究, **13**, 73-88.
- 松下姫歌・尾方 綾 (2007). 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ—DASとSD法を用いて— 広島大学心理学研究, **7**, 325-337.
- 宮元忠雄 (1983). 岩波講座精神の科10 有限と超越 岩波書房
- 岡村達也 (1983). 「死に対する態度」の研究—青年と成人との比較— 東京大学教育学部紀要, **23**, 331-343.
- 小此木啓吾 (1979). 対象喪失 中央新書
- 李 敏子 (1990). 生, 死, 言葉, 身体 of イメージ—青年を対象として— 心理学研究, **61**, 79-86.
- 坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤 暁 (2001). 配偶者喪失後の対処パターンと精神健康との関連—心身医学, **41**, 440-439.
- 才藤千津子 (2006). 欧米における悲嘆の研究における近年の研究動向に関する一考察—『意味の再構築』—という視点から見た死別と悲嘆への牧会ケアに向け

- てー 新島学園短期大学紀要, 26, 29-41.
- 齋藤英子・林 かおり・藤野文代 (2002). 大学生の死のイメージに関する研究ー TEG・Self-Esteem・身近な人の死の経験による分析ー 群馬保健学紀要, 23, 49-53.
- 澤井 敦 (2000). 現代日本の死生観と社会構造 (上) 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究 (創刊号), 13-29.
- 渋谷園枝・渋谷昌三 (1991). 「生」と「死」のイメージ調査の基礎的分析 山梨医科大学紀要, 8, 41-52.
- Stroebe, M. & Schut, H. (1999). The dual process model of coping with bereavement : Rationale and description. *Death Studies*, 23, 197-224.
- 高根芳雄 (1980). 多次元尺度法 東京大学出版会
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70, 327-332.
- 丹下智香子 (2002). 「死」からの連想語の KJ 法による分類ー死生観の構造の検討ー 名古屋大学紀要, 49, 157-168.
- 丹下智香子 (2004a). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 15, 65-76.
- 丹下智香子 (2004b). 宗教性と死に対する態度 名古屋大学教育学部紀要, 51, 35-49.
- Templer, D.I. (1970). The construction and validation of death anxiety scale. *The Journal of Psychology*, 82, 165-177.
- Thorson, J.A. & Powell, F.C. (1993). Relationships of death anxiety and sense of humor. *Psychological Reports*, 72, 1364-1366.
- 渡邊照美 (2004). 死別経験者の死別に対する認知と関連要因の検討ーケア提供に着目してー 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部, 53, 411-420.
- Wong, P.T.P., Reler, G.T., & Gesser, G. (1994). Death attitude profile-revised : A multidimensional measure of attitudes toward death. In R.A. Neomeyer (Ed) , *Death anxiety handbook*. London : Taylor & Francis.121-148.
- Worden, J.W. (1991). *Grief counseling and grief therapy*. New York : Springer Publishing Company.
- (鳴澤 實 (訳) (1993). グリーフカウンセリング 川島書店)
- 山本 力 (1997). 喪失の様態と悲哀の仕事 心理臨床学研究, 14, 403-414.
- 山中康裕 (2006). いのちの科学を語る 1 子どもの心と自然 東方出版
- (主任指導教員 岡本祐子)